

第2章 三浦の歴史



大椿寺の埴輪（三浦市撮影）

< 拝観の場合は要連絡 >



来福寺の和田義盛像（三浦市撮影）

< 拝観不可 >



空から見た新井城址（京急油壺マリンパーク提供）

1 原始時代

三浦にヒトが住みついたころ=旧石器時代

関東地方では、約2万年くらい前の地層から石を打ち砕いて作った打製石器が見つかっており、三浦半島でもその頃から人々が住みついていただろうと考えられています。この頃はまだ土器が発見されていないため「旧石器時代」と呼ばれています。

三浦市のこの時代の遺跡としては小網代^{こあじろ}の水谷戸^{みずやと}や松輪^{まつわ}の大畑^{おおはたけ}などがあり、ローム層の赤土の中から黒曜石^{こくようせき}などの石器が見つかっています。三浦半島の遺跡の特徴は、いずれも当時の海岸から離れた海拔100～150mくらいの見通しのきく台地にあったことです。

狩りや漁^{りょう}中心の生活=縄文^{じょうもん}時代

今から1万年ほど前から、気候が暖かくなるとともに活発だった火山活動もおさまってきました。大陸をおおっていた氷河がとけて海水面が高くなり、日本列島は大陸から切り離されました。

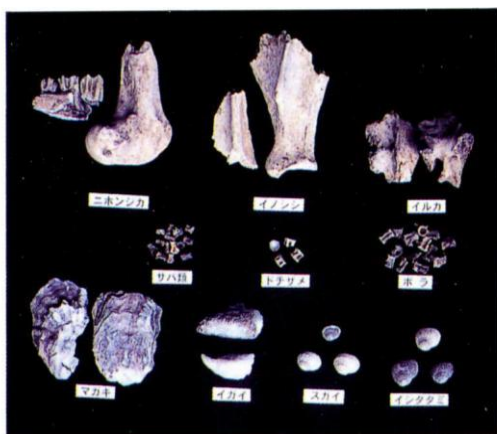
ちょうどこの頃から土器と弓矢が使われるようになり、稲作が始まるまでの約8000年の間、狩りや漁・採集を中心とした生活が営まれていました。使われていた土器に縄目の模様がつけられることが多かったので、この時代を「縄文時代」と呼んでいます。

三浦半島には、当時の入り江や内湾に面して縄文時代の貝塚遺跡が数多くあって研究も進んでいます。横須賀市の夏島貝塚の土器や平坂の人骨は、縄文時代の研究の上で全国的にも大変貴重なものです。

(いずれも戦後に発掘された縄文早期の遺跡で、夏島遺跡は出土物が炭素年代測定で約9000年前と測定された古い土器のあることで、また、夏島遺跡は平坂人骨の見つかったことで有名です。)

三浦市内にも松輪の大浦山・三戸・諸磯などに多くの遺跡があり、縄文土器をはじめ石器・動物や魚の骨などたくさんの遺物が見つっています。また、諸磯遺跡では竪穴住居も見つかり、海の貝や魚あるいは陸の小さな獣や木の実などをとって食料とし、1か所にすみつく生活をしていた縄文時代の人々の暮らしがわかってきています。三浦市内から出土した土器は、「三戸土器」・「諸磯土器」などとして縄文時代年代区分の標準土器とされています。

三浦市内から出土した土器や石器などの遺物は、これ以降の弥生時代や古墳時代のものなどもふくめて初声にある市文化財収蔵庫に収められ、いつでも見学できるようになっています。



諸磯遺跡から出土した動物の
骨・魚の骨・貝類

(三浦市所有)



三浦市の原始時代の遺跡

(編集委員作成)

赤坂遺跡に住んだ人々=弥生時代

今から 2400 年くらい前(紀元前 4 世紀ころ)に日本に稲作が伝えられると、人々の生活が大きく変わりました。狩猟・採集の時代から、農業(栽培)を中心とした時代に移っていったのです。貯蔵を主目的とした薄手で硬い弥生土器が使用され、そのほか稲作のための石包丁や青銅器・鉄器などの金属器も使われるようになってきました。この時代を、土器の発見された東京の地名をとって「弥生時代」と呼んでいます。

三浦半島でも、近くに湧き水の出る谷戸のあるところを中心にして 20m 以上の台地で多くの遺跡が発見されており、紀元前後(弥生時代中・後期)から半島各地に弥生文化が広がっていたことが確認されています。

三浦市内では、赤坂(初声)・大浦山(松輪)・遊ヶ崎(城ヶ島)・才京込(諸磯)などの多くの遺跡が発見されています。特に赤坂遺跡からは以前から勾玉や鉄斧などが発見されており、1977(昭和 52)年に行われた遺跡全体の約 1/100 にあたる部分の本格的調査では、多数の住居跡が発見されるとともに東日本最大級の住居跡(15m×12m)も見つかり、全国的にも珍しい大規模遺跡であることが確認されました。これは、この赤坂遺跡が三浦半島の拠点集落であったことを示しているばかりでなく、弥生時代後期のムラからクニへの移行期を考える重要な遺跡として注目を集めています。そして現在、こうした赤坂遺跡を国指定の史跡として保存することが検討されています。

また、大浦山洞穴や毘沙門洞穴など、海に突き出た台地の先端にあるたくさんの大小の洞穴の中からも、多くの骨角器や貝製の漁撈具が発見されています。このことは、この地方では縄文時代に引き続いて漁や採集が生活の中心であったこ



赤坂遺跡の住居跡

(赤坂遺跡調査団撮影)

とを示しています。

さらに、これらの洞穴からは、多くの遺物と共に人骨や占いに使われた
ト骨^{ほっこつ}も発見されています。このことから、当時の人々が洞穴を生活の場としてだけではなく、占いや埋葬の場として利用していたことがうかがえます。

特にト骨は、『魏志倭人伝』や『古事記』に登場する占いの道具でしたが、1949(昭和 24)年に間口^{まぐち}洞穴(松輪)から日本で初めて発見されました。

弥生時代の漁撈具

もみ跡が見られる土器

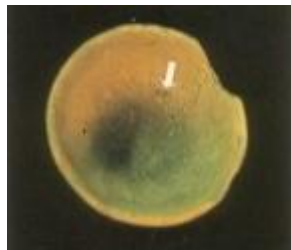
ト骨ー占いに使用した骨

<大浦山洞穴遺跡出土>



(三浦市所有)

<三戸原 出土>



(三浦市所有)

<大浦山洞穴遺跡出土>



(三浦市所有)



弥生時代の漁撈具

(海外洞穴遺跡出土)

(三浦市所有)



弥生時代の土器

(赤坂出土)

(三浦市所有)

2 古代

古墳が作られたころの時代

3世紀から7世紀にかけて、近畿^{きんき}地方を中心に全国各地に大小多数の古墳が作られるようになりました。農業の発展とともに人々の間に富と力の差があらわれるようになり、その地域を支配した豪族^{こうぞく}がその富と力の象^{しょうちょう}徴として、豪華な副葬品^{ふうさうひん}をそなえた高塚墳を作っていたのがこれ



三浦市の主な古墳

にあたります。

三浦半島でも、少し遅れて5世紀から8世紀にかけて古墳が各地で見つかっています。前方後円墳などの大きなものは少なく、丘の上に作られた比較的小さな円墳が中心で、当時の海岸を見わたす場所に多く作られています。古墳時代の後半になると、山や海岸の崖に横穴を掘って墳墓としものが多く見られるようになります。

三浦市内には図のようにたくさんの古墳が分布していますが、そ

(斉藤氏作成)の多くは横穴古墳です。それらの中には、まだきちんと調査のすんでいないものが数多くあります。

向ヶ崎(三崎)の大椿寺裏山^{だいちんじ}の円墳は、城ヶ島大橋の工事の際に古墳の形がこわされてしまいましたが、その工事のときに人物(第2章のとびらのページ)や兜・馬などの埴輪が発見されています。また、菊名の白山神社裏の横穴古墳は家の形をした「切妻造^{きりづまづくり}妻入^{つまいり}形古墳^{がたこふん}(雨水を二方向へ流す屋

根の形式)」と呼ばれる形式で、内部は棟や柱などが浮き彫りにされていたり、一部には朱塗りのあとが見られるものです。

このようにたくさん残る古代の古墳・遺跡・古代の東海道が通っていたこと、『古事記』・『日本書紀』に出てくる日本武尊が三浦半島から房総半島に渡ったという伝説があることなどを考えたとき、当時の三浦半島の人々の生活が中央と結びついていたことがうかがえます。



子持ち勾玉<三戸出土>
(三浦市撮影)



大椿寺裏山古墳出土
の馬型埴輪



白山神社古墳
(三浦市撮影)

<神奈川県立歴史博物館所蔵>
(三浦市撮影)

奈良・平安時代の三浦

「三浦」(御浦)という地名が初めて古い文献に出てくるのは、720年に完成した奈良時代の歴史書『日本書紀』のなかです。692年の項のなかに「^{かのとのひつじのひ}辛未に、^{みこともち}相模国^{からす}司、^{ひなふたつたてまつ}赤鳥の雛二隻献^{まう}れり。言さく、『^{みうらのこおり}御浦郡に^え獲たり』」、「相模国^{ふせのあそみしこふ}司布勢朝臣色布智等・^{すけのみやつこ}御浦郡少領と、赤鳥獲たる者^{かしまのおみくす}鹿嶋臣^す椽樟とに、^{くらい}位及び^{ものたま}祿賜ふ。御浦郡の二^{ふたとせ}年の^{えつき}調役服^{ゆる}す。①」とあります。

また同じく奈良時代の^{しょうそういん}正倉院文書には、735年の『相模国封戸租交易帳』として檜前女王の土地「御浦郡^{ひびるごう}氷蛭郷」があげられ、田の大きさや税の額が記されたりしています。この氷蛭郷とは、今の金田の^{ひるた}蛭田の地域を指すとされています。いずれも、天皇を中心とした律令体制が三浦半島のすみずみまでいきとどいていたことがよくわかります。

さらに平安時代の『^{わみょうるいじょうしゅう}和名類聚抄』という書物には、御浦郡に「^{たづ}田津、^あ御浦(美宇良)、^い氷蛭(比々留)、三崎(美佐木)、^あ安慰」の5つの地名が示されています(具体的にはどこの地域を指すか不明の点も多い)。

このように、奈良時代から平安時代にかけての三浦のようすは都にあったいくつかの文書に出てきますが、文書の数も少なく、まだまだ具体的なようすはわかっていないのが実情です。

かいなん

海南神社のいわれ

毎年7月 17 日から3日間にわたって盛大な祭りが行われている海南神社には、次のような言い伝えがあります。

奈良時代に中央の貴族であった藤原一族の藤原資^{すけみつ}盈は、貴族同士の争いに巻き込まれて九州から三崎へ流れつきました。資盈は房州の海賊を退治するとともに、土地の人たちにいろいろなことを教えてくれました。このことに感謝した土地の人たちは、866 年(平安時代の初めごろ)に資盈とその妃である盈^{みつわた}渡^{ひめ}姫をまつり、海南神社を作りました。

また、鎌倉幕府成立の功労者となった三浦大^{おお}介^{すけ}義^{よし}明^{あき}が、海南神社の境内^{けいだい}で「神事狐合（白と赤のきつねを戦わせ、占うこと）」を行って頼朝に味方することを決めたという話もあります。



海南神社

(三浦市撮影)

城ヶ島神宮寺(廃寺)と行基

薬師山(城ヶ島)にあったといわれる神宮寺は、奈良時代に大仏建^{こんりゅう}立に協力した行基によって開かれたと伝えられています。現在は見桃寺にある本尊の薬師如来^{やくしにょらいぞう}像も、行基^{ぎょうき}の作とされています。大仏建立のために全国をめぐった行基は、遠く三浦にも足を運んできたのでしょうか。

また、和田（初声）の^{てんよういん}天養院にある薬師如来像もまた、代表的な平安中期の作と考えられています。

いずれも奈良・平安のころから、三浦の人たちの信仰を集めた仏像なのでしょうし、中央の貴族や僧侶との結びつきのなかに、三浦の人たちの暮らしもあったようです。



見桃寺薬師如来像



天養院薬師如来像

相模のつわもの三浦一族

（三浦市撮影）

平安時代の終わりごろから鎌倉時代にかけて、三浦半島に本拠地を置いていた三浦氏の活躍によって、「三浦」の名が大きく歴史の上に登場してきました。

三浦氏は、平安時代の中ごろに関東地方に住みついた桓武天皇の一族と伝えられています。11世紀の中ごろに東北地方で起きた前九年の役（1051年～1062年）で、源頼義に従った平^{よりよし}太夫^{たいら}為通^{のたゆうためみち}に三浦郡が与えられたので、為通が「三浦」を家名にしたと言われています。

そのおよそ20年後に起きた後三年の役（1083年～1097年）には、為通の子^{ためつぐ}為継^{よしいえ}も源義家^{はちまん}（八幡太郎義家）に従って活躍し、いっそう源氏と三浦一族の結びつきが強まりました。

そのころの関東や東北地方では古代の律令制度がくずれ、有力農民たちは武力を用いて自分たちの土地を守っていました。そして、そのような武力を持った有力農民の頭となったのが源氏や平家でした。その源氏と主従関係を結ぶことで、関東地方の有力武士団の一つとして成長していったのが三浦氏でありました。

鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』^{あづまかがみ}には、「^{のうそ}曩祖三浦平太郎為繼、八幡殿(源義家)に属して奉り、奥州の(清原)^{たけひら}武衡・^{いえひら}家衡を征してより以後、あくまでその^{おんろく}恩禄を啄むところなり」とあります。

三浦為繼^{ためつぐ}と鎌倉権五郎景正^{ごんごろうかげまさ}のエピソード

『奥州後三年記』より

相模国住人鎌倉権五郎景正という者あり、年わずか16歳。大軍の前に命を捨てて戦う間に右の目に矢突き刺されてもなお相手の首を射ぬき、その後、景正は兜をぬぎ^{あおむ}仰向けざまに倒れた。

三浦平太郎為繼というものあり。評判の強^{つわもの}者なり。これを見て、靴を履くまま景正が顔を踏まえ、矢を抜かんとす。すると景正倒れながら刀を抜き、上着のすそをつかみ突き上げる。

為繼驚きて「これはいかに、何とする。」景正答えて、「弓矢にあたりて死するは強者の望むところ。ところが生きながら土足にて顔を踏みつけらるるは何ごとぞ。お前を^{かたき}仇として殺し、我もまたここに死なん。」という。為繼、舌をまきていうことなし。^{ひざ}膝をかがめ、顔を押さえ矢を抜いてやったという。

三浦の武士

^{ほうげん}保元・^{へいじ}平治の乱にも、三浦武士はたくさん都へ動員された。特に、平治の乱に敗れた頼朝の父源義朝は三浦氏を頼りとし、都を逃げる義朝に三浦義澄^{よしずみ}が最後まで従っている。また、義朝の長子の^{あくげんた}悪源太義平^{よしひら}の母は三浦義明の娘であり、義澄の兄弟であったという。

源平の戦いのなかでも、三浦武士はあちこちで活躍した。平氏に決定的な打撃を与えた「一の谷の合戦」で、誰もが尻込みをする^{ひよどりこ}越えの急坂の上で「三浦では鳥を射るにも、これくらいの坂は馬で歩く。三浦の武士にとっては馬の練習場も同然。」と馬に乗って^か駆け降りました佐原十郎義連^{よしつら}の話は、三浦武士の勇敢さを示すものとして有名で

ある。

3 鎌倉時代

鎌倉幕府と三浦一族（P2-13「三浦家略系図」参照）

鎌倉幕府をたてた源頼朝が伊豆で反平氏の旗揚げをしたとき、これに協力して大きな力となったのは、衣笠城（横須賀）にいた三浦大介義明（為継から3代目）とその一族でした。平家の軍勢に衣笠城を攻められて義明は城とともに討ち死にしました（衣笠城の合戦）が、義明の子義澄や孫の和田義盛が伊豆で敗れた頼朝と房総で合流して関東地方の源氏勢力を結集させ、1192年の鎌倉幕府成立へと結びつけたのです。

幕府成立に重要な役割を果たした三浦一族を頼朝は重視し、和田義盛を幕府の重要機関である侍所きむらいどころの別当べつとう（長官）につけるとともに、義澄を三浦の別当と呼んで幕府の元老に位置づけました。

義澄の領地である三崎には、頼朝の別荘である椿の御所・桜の御所・桃の御所が作られました。また、頼朝が多く武士とともに歌や踊りを楽しんだということから、歌舞島かぶしま（三崎二町谷ふたまちや）の地名が今でも残っています。

しかし、頼朝の死後、三浦氏は北条氏と対立を深めました。そして、和田義盛が三浦氏の勢力を固めて北条氏を倒そうと立ち上がりましたが、義澄の子の義村よしむらが北条方へ寝返ったこともあって鎌倉の由比が浜での戦い（1213年和田の乱）で敗れました。また、義村の一族も、三代将軍実朝の暗殺事件や承久じょうきゅうの乱を通して一族の内紛ないふんや北条氏との対立がおこり、義村の子の泰村やすむら・光村みつむらのときに北条氏に攻め滅ぼされてしまいました（1247年宝治ほうじの乱）。こうした動きのなかで三浦氏は幕府中央から排除され、執権北条氏が幕府を動かすようになりました。

三浦市には、上宮田にある^{らいふくじ}来福寺の和田義盛木像(市指定文化財)をはじめ、初声の和田を中心とした義盛の旧跡や金田湾を見下ろす丘の上にある義村の墓と伝えられる石碑など三浦氏に関わる史跡が数多く残っており、三浦市と三浦一族の関係の深さを物語っています。



三浦義村の墓

< 金田・岩浦 >

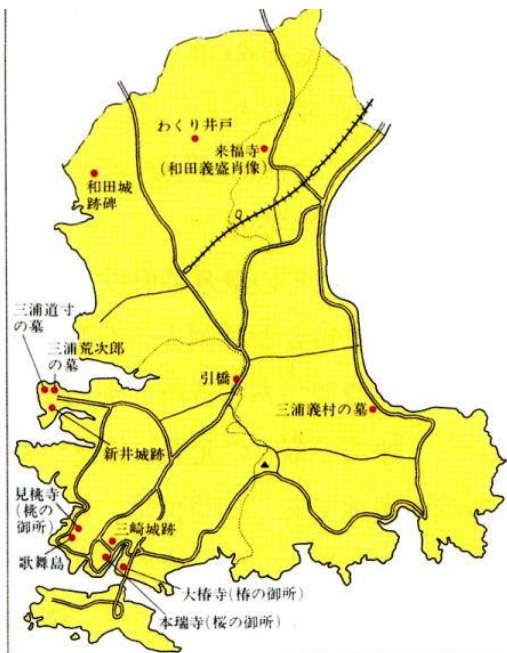
(三浦市撮影)



和田義盛精進の地 (わくり井戸)

< 初声・高円坊 >

(三浦市撮影)



三浦氏にかかわる主な史跡

(編集委員作成)

